経験論再検討

——W. Sellars ‘《所与》の神話’ に従って——

大 畑 甚 一

Empiricism : a re-examination

——following the W. Sellars' thesis: 'the Myth of the Given'——

Jin-ichi Ohhata

Empiricism, traditionally, has analyzed 'the foundation' of empirical knowledge in terms of 'the Given' as an epistemological category. What is 'the foundation'? What meaning does it have? Following W. Sellars, two requirements are postulated, i. e., (1) there is a structure of particular matter of fact that is non-inferentially known. (2) non-inferential knowledge about the structure is ultimate. In this direction, a consistent picture of empiricism is drawn. In this process, 'the Given' must be construed as immanent 'awareness', on which the edifice of empirical knowledge rests. Indeed, 'the Given' as its foundation is the Myth, but this assertion does not imply the rejection of the inner, non-verbal episodes of 'observing', 'impression' or 'idea'. A new epistemology is in future.

《所与》、《与件》という哲学専門語は、それを使用する哲学者それぞれにより異なった意味内容がある。センス・データ、物質的対象、普遍(者)等々。しかし、これらのいずれを採るにしても、《所与》は、哲学的分析が行なわれ、ある主張がなされるその枠組であったし、今日もまたそうであろう。知識の基礎を分析するとき、経験論者は伝統的にそれを《印象》、《観念》、《センス・データ》あるいは《知覚与件》と考えて来た。経験的知識の基礎は、彼らによれば、もちろん《経験》であるが、細かくは、上記の《与件》が考えられていた。

本稿では、どういう意味で、それらが経験的知識の基礎といわれるのか、を分

析してみたい。経験論の再検討という目的のうちで、とくに《所与》そのものの身分に関心をもって、本稿はその序論的覚書である。手法については、ここでは、意味論的分析、とくに、セラーズ W. Sellars の方法に従っている⁽¹⁾。

1.

《所与》という認識論的カテゴリーから、経験的知識の基礎を解明するという仕事が伝統的に経験論哲学のテーマであった。ところで知識の基礎が問題であれば、それは単にある所与、たとえば感覚内容が与えられているというだけで、それが基礎というわけにはいかない。知識の基礎としては、少なくともある事実についてのある種の判断、ある種の知識が考えられねばならない。単に与件があるとうだけでは、それは事実の記述でもなく、まして知識ではない。特殊なものが感覚内容としてあるというだけでなく、むしろ、ある事実、ある事実についての判定、がまず考えられねばならない。この事情を、セラーズに倣っていえば、特殊な事実のある構造が存在しなければならない。このことは次の2個の要請で書き上げられる。

- (1) 事実はそれぞれ、かくかくの事実であることが、非推論的に知られる。特殊な事実であれ、一般的真理であれ、それら他の知識をその事実は前提しない。
- (2) この構造に属する事実の非推論的知識は、世界について事実的主張をするための究極的なものである。

この経験的知識の基礎の像は、こう書き上げると、このような事実の階層の存在について疑念がわくが、しかし、このレベルに関する知識があるとすれば、ともかく知識であり、さらに、権威ある知識であることになる。

この(1)、(2)の要請を満足する一層細かい像を画くとしよう。セラーズの画く像の再現であるが、(1)、(2)の要請に整合的な像はまた伝統的な経験論に共通な像といってよいものである。

事実についての言明が知識であるためにはもちろん信頼しうるものであるだけでなく、信頼度に関するある仕方で、言明がなされねばならない。言明する

ことと、権威ないし典拠との間に関連がなければ、その主張は確信にとどまっても知識の表現ではない。ところで、この言明の信頼度は、他の言明に支えられるものではありえない。これはこのレベルの知識がすべて非推論的という要請に反するから。

さてこのような要求に少なくとも合ったものは観察を報告する言明である。——“これは赤い”等々。これは卒直に言明されれば、権威があり、しかも、推論を表わしていない。それでは、この言明のもつ権威はどう理解すればよいか。それは言明がなされるその当の環境において言明されるという事実から生ずる。このことは次のようにいえる。言明がなされる環境をその感覚と結合する用を果たすいわゆる token-reflexive expression をもつという事実による。この型の表現は、同一環境において発話される場合に限って同一の言明をしうる。そうでない型の表現にこのようなことは言えないからである。

ところで文-token が信頼性をもちうる仕方として

(i) 文-type の権威から来るもの

(ii) ある環境にある仕方で存在するようになったという事実から来るもの
——文-token の信頼性が文-type の信頼性より生じないもの——たとえば“これは赤い”。

(i) には分析的文が属し、それ自体他の文から導出されないという意味で、本質的信頼性をもつか、あるいは、本質的信頼性をもつ他の文-type に対する論理的関係によって、その文-type の信頼性が生ずる。これに対して、経験的な文-type は(ii)に属する。この文-type の信頼性は、他の文-type の信頼性に全面的に由来しない。したがって経験的文-type に信頼性が生ずるのは、ある文-token——その文の権威が文-type の権威より生じない文-token——に対する論理的関係によってである。

(i)' 分析的文の本質的信頼性はその文-type の token としてである。

(ii)' ‘観察を表現する’文-token の信頼性は、token から type へ移る。

2.

以上が経験論一般に共通の像であるといつてよい。ここで再び、問うことにしよう。観察的知識を表現する文-tokenの権威はどのように理解されるだろうか。

(i), (ii), (i)', (ii)' には鋭い差異があることは明らかである。すなわち、分析的文-token (分析的言明) と観察的文-token (観察報告) との間に明らかな違いがある。しかしそれにも拘わらず、観察報告と一般的な経験的言明とのちがいが、むしろ観察報告を分析的言明に近づける。すなわち、通常の経験的言明はそれが偽な (真でない) 言明であってもなお正しい言明でありうる。正しい言明であることが真な言明であることの必要条件でない。しかるに観察報告は正しくなされることが真なる報告であることの必要かつ十分条件である。この相異に注意すると、後者の事情は、分析的言明に類似している。分析的言明では、いうまでもなく正しい言明はまさに真な言明に等しい言明であるから。このことから、多少粗い方がいい方であるが、たとえば、“これは赤い” という報告が正しいとは、‘これ’、‘は’、‘赤い’ という各語の用法のルールに従って言明がなされることだということになる。

ここで《報告》とは、報告者が自分自身へする報告も含めて考えることにする。このようなとり方はむしろ認識論の専門的用法に従ってのことである。これを考慮して《確証》《確認》(Konstantierung) ともいえるものである。この専門的用法では言明、文-tokenは、必ずしも公然の言語行為でなしに、報告的役割を演ずる。報告、確証について、その正しさを言語行為の正しさと類比的に解する。このように観察報告を言語行為と解し、その正しさをその行為の正しさと解し、ある観察報告の権威はあるルールに従っている事実と解するとすれば、われわれはもっとも直截な形で《所与》に直面することになる。《確証》の権威は、《直接知》(awareness) の非言語的対話(episode)にもとづくことになる。《直接知》：すなわち、何かがかくかくであることを直接に知る、たとえば、これが赤いことを直接に知ること——この《直接知》の非言語的対話が、本質的 (intrinsic) な権威をもつ。いわばそれは自己確証 (self-authenticating) である。そして、もし言語行為が正しいルールに従って行なわれれば、その権威は言語行為においてあらわれる。この自己確証の対話に経験的知識がその基礎をもつのである。

これらの本質的に確証的な対話が、ある感覚内容が赤であるという直接知のような内訳であるか、それとも、ある物理的対象がある人に赤と見えるという直接知のような内訳であるか、いずれにしろ、この見解の実質では同じことである。

3.

このような内在的な見解に対して多少とも代案を試みることにする。

赤い対象が標準的な条件の下でみられるとき、そのときに限って、赤い項を前にして‘それは赤い’という token（これは公然としているときもありそうでないときもある）が《確証》であり、観察的知識をその token が表現する、と解釈するとしよう。この代案では、‘これは赤い’という token のあらわれは、その token が何かある斉一性（ある標準的な原因として、ある環境の下で）の事例であるという意味でのみ、ルールに従うことである。

ところで、報告は知識の表現であるためには、権威をもつだけでなく、この権威は、その報告者その人によって是認されねばならない。このことは上例に則していえば、報告‘これは赤い’の権威は、知覚者に関係する赤い項の存在が、報告のあらわれから推論されるという事実にあることになる。とすれば、この推論をしうる人、したがって、赤の概念さらに‘これは赤い’という発話の概念をももつ人、つまり、ある知覚条件（標準的條件）の概念をもった人、その人だけが、‘これは赤い’という token に対して、権威の是認をする立場にあることとなる。つまり、確証‘これは赤い’が観察的知識を表現するためには、それは、標準的條件の下で、赤い対象の存在の徴（しるし）でなければならない。さらに、あらかじめ知識として、この文——確証ではない——が赤い対象の存在の徴であること、すなわち、知覚者は、‘これは赤い’という token が視知覚の標準的條件の下で赤い対象の存在の徴であることを知っていなければならない。

ある token が観察的知識の表現となるに先立って、このような言語的対話が、物理的対象の存在の信頼すべき指標であることを知っていなければならぬことになる。もし、そうなら、観察的知識をもつには、あらかじめ多くのことを知っていなければならないことになる。この論点は、観察的知識は、次の形《あるもの

は、ある他のものの信頼すべき徴である」という一般的事実を知っていることを前提とするということである。

これを認めることは、伝統的な経験論のいう「観察的知識は独立している」という考え方を放棄することであろう。いくつかの特殊な事実を知ってからこの一般的な事実を知るという経験論にこれは矛盾することである。

この事情は、上に述べた代案が一貫した経験論の像に合わないことを示しているといつてよい。経験論の内在的性格をこえることは困難である。

以前にみた経験論に戻るとしよう。そこでは、観察は、ある自己確証の非言語的対話によって構成され、その権威は、言語的行為がその言語の意味論的規則と一致してなされるときにはじめて、言語的行為に伝達される。この事情は、正に「所与」の神話である。というのは、所与は、認識論の伝統において、これらの自己確証の対話により確かめられるものであるから。伝統的経験論が、知覚的に与えられたものを、経験的知識の基礎であるという主張をするのは、正にこの枠組である。

以上は、経験論の一貫した像を画く過程で、経験論が経験的知識の基礎を「与件」に求めたその意味の分析である。所説は既述のようにセラーズの所説に拠った。

4.

経験的知識が「基礎」をもつかという問題について、以上の所説に関する限り、否定的であるといつてよい。少なくとも、経験論が考えて来たその枠組は一つの神話であるとしなければならない。すなわち、認識論のカテゴリーとしての「所与」、経験的知識の「基礎」として「所与」をもつという主張そのものが検討されねばならない。

ところで、この枠組を棄てるにしても、問題を整理する必要がある。というのは、認識論のカテゴリーとしての「所与」は正しく神話であるにしても、このことがただちに「観察すること」がいかなる意味でも内部的、非言語的対話ではないということではない。前者は神話として拒否しても、後者のそういう性格づけ

を拒否することではない。神話といわれるのはまさに経験的知識の基礎としての《所与》に対してである。したがって、課題の一つは、《観察》、《直接的経験》、《感覚内容》といった事柄の身分（論理）をあらためて、以上の神話から解放された形で検討することである。

ところで、経験論のもつもう一つの虚構⁽²⁾として、次のことを指摘しておかねばならない。言語の習得の仕方について、その基礎的な枠組があるかどうか問題にするとしよう。この問題に対して、ある肯定的な答えを用意しようという考え方から、ある場合には、感覚与件、それらの間の関係がとられたり、またある場合には、物理的事物、時空内の過程などがとられたりする（ここでは、どちらをとるかが問題ではない）。ところで、言語習得の基礎的な枠組について見解が分かれることがあっても、これらの考え方では、基礎的な記述的語彙とその世界との間に、ある直接指示的（ostensive）な結帯が存在するという仮定がある。基礎的な語彙は、世界のある事物、事象を直接指示していなければならないとされる。この考え方から出発すれば、語彙は一般に基本的には何かについてそれを記述していなければ無意味とされることとなる。原理的には、ある言語が何ものについても語ることがないということを一切認めない考え方である。

この見解が周知の実証主義的見解である。この立場では、理論的で、指示をもたぬ言語は補助的なものにすぎない。その身分は、世界との指示関係をもつ観察的言語に対する補助手段であるところにある。

言語習得に関して、基礎的語彙が世界を直接指示するという仮定に戻ると、この仮定のもつ認識論的意義は、既述の《所与》のもった意義と類比的である。むしろ、その別表現と考えてよいであろう。

この《直接指示》の虚構と、理論的言語と観察的言語との間の論理的関係とは別の問題であることに注意しよう。後者の問題は、モデルと理論、対応規則の解釈など困難な問題を含んでいるが、前者の虚構から解放された形で考えられるべき問題である。

以上から、問題は恒に、もっぱら、認識論的カテゴリーとしての《所与》、経験的知識の基礎と考えられた《所与》、すなわち、《所与》を基本的なものとし

て固定するところにあった。したがって問題は、この意味での《所与》に対して、それにコミットしない形で、《感覚内容》、《直接経験》などの論理を試みることであろう。

この課題はどのような方向で果たされるだろうか。一つには、理論的言語は、観察的言語に還元しえないという事柄に留意することである。そして、このことを、技術的に仕上げられた科学理論の構成概念についてだけでなく、日常的な諸概念にも適用することであらう。たとえば、思考は、ある内的過程であり、これは単に行動や言語表現に還元することは出来ないとすれば、この意味で、思考は一つの理論的存在といえよう。この手法は、感覚内容などに対しても適用されよう。セラーズはすでにこれを試みている⁽³⁾。

経験的知識に基礎がないということはいいすぎであらう。しかし、この《基礎》というタームが、感覚内容、直接経験といわれるものの論理を、《所与》の神話から解放した形で作り上げることを妨げて来たことは事実であらう。そして、この経験論的認識論を棄てるのが、《直接性》(Unmittelbarkeit)を徹底的に嫌悪したヘーゲルの知識観に移ることを意味するかどうか、これは早計の評価である。そのような知識観、認識論がもはや、いわゆる経験論でないとしても、その呼び名が必要ならすでにのべたような課題に対する実質的な仕事の結果についてなさるべきことがらであらう。

(1) W. Sellars : Empiricism and the Philosophy of Mind, *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, vol. I., 1956, § 32 ff., in particular:

(2) *op. cit.* § 43

(3) *op. cit.* § 56 ff.

筆者紹介：

1923年に生まれる。1958年、東京都立大学大学院人文科学研究科修了。現在、北海道大学文学部助教授。

主要著書論文：

『思想の流れ』（共著、芸林書房）、「非対称的結合子Tをもつ論理系について」（北海道大学『人文科学論集』6）